

令和6年度 学力向上指導改善プラン

三田市立長坂中学校 堀田 幸興

学校教育目標		4月		2～3月			
推進主体		成果となる目標		年度末評価			
学力に関する前年度の状況・経年の課題等		学力向上に向けての重点的な目標		(今年度の成果と来年度に向けた課題等)			
		(指標となる数値等)		評価			
学力 の 状 況	全国学力・学習状況調査結果の状況(国語、算数・数学に関する質問調査の結果も含む)	<教科の概要> ○全国平均より高い正答率の領域は「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」であった。 ●記述式の正答率が全国平均より低かった。 <特に成果の見られた領域や設問> ○「文章の中心的な部分と付加的な部分について叙述を基に読み、要旨を把握する」とは、全国平均を14.0ポイント上回り良好である。 ○「読み手の立場に立って、叙述の仕方などを確かめて、文章を熟する」とは、全国平均を10.4ポイント上回り良好である。 <特に課題の見られた領域や設問> ●「自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く」とは全国平均を4.5ポイント下回った。 ●「文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考える」とは全国平均を12.0ポイント下回った。	・学校評価における「自分にはよいところがあると思います」の肯定的回答が80%を上回る。 ・学校評価における「将来の夢や目標を持っている」の肯定的回答が90%を上回る。 ・全国学力・学習状況調査「自分の考えがうまく伝わるよう工夫して発表しましたか」という質問項目において、「発表していた」「どちらかといえば発表していた」と答える生徒の割合が50%を上回る。	・各授業の中で実生活と関連づけた課題の設定や生徒指導の3機能(自己存在感・共感的人間関係・自己決定の場)を活かした授業展開を意識し、生徒一人ひとりが活躍できる場の設定をする。(各教科の授業で4グループでの活動の充実を図り、自分の考えや思いを発表する場面を設定する。) ・カリキュラム・マネジメントの充実を図る。(教科横断的な計画、PDCAサイクル、様々な教育資源の活用) ・研究授業を行い、授業内での協働学習の在り方について、教員間で意見を交流する機会を設ける。			
	算数・数学	<教科の概要> ○全国平均より高い正答率の領域は「関数」であった。 ●全国平均より低い正答率の領域は「数式」「図形」「データの活用」であった。 <特に成果の見られた領域や設問> ○「数と正式の乗法の計算ができる」とは、全国平均を5.2ポイント上回り良好である。 ○「事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明すること」とは、全国平均を11.5ポイント上回り良好である。 <特に課題の見られた領域や設問> ●「自然数の意味を理解しているかどうかをみる」では全国平均を26.1ポイント下回った。 ●「百分位範囲の意味を理解している」では全国平均を14.3ポイント下回った。	・家庭学習習慣の確立と充実	・学校評価における、生徒・保護者アンケートで「家庭学習の習慣ができていない」の項目が80%以上の肯定評価となる。 ・全国学力・学習状況調査における1日あたりの学習時間が全国平均より上回る。	・各教科において、基礎的・基本的な家庭学習の課題を出すことで、家庭学習の習慣を確立する。 ・各教科で作成している評価のシラバスを活用し、身に付けたい力(単元の目標)を生徒と共有して、主体的な学習の取り組みを促進する。 ・各学期末に学習時間や取り組み等の目標を設定し、主体的な学習習慣の育成を図る。		
	定期テスト、単元テストなどによる状況(各教科)	○各教科で基礎・基本を問う問題については、正答率が高めが徐々に増加している。 ●文章題の作成や活用、数・関数では、問題文を最後まで読まずに解答するなど設問の意図を読み取れない傾向が各教科に共通して見られる。「聞き取る力」に課題が見られ、今後も、「聞き取る力」の強化と言語活動の活性化に力をいれなければならないと考える。	・学習規律の徹底と学力補充の充実	・全国学力・学習状況調査における教科の平均正答率が国語・数学ともに全国平均より上回る。 ・学校評価アンケートの質問項目において、「授業に真剣に取り組んでいる」と答える生徒の割合が昨年度の91.9%を上回る。 ・学校評価アンケートの質問項目において「授業内容でわからないところを質問しやすい」の項目で昨年度の78.8%を上回る。	・各教科で単元小テストを実施し、基礎学力の定着を細目に確認する。 ・単元別学習システム推進教員との打ち合わせ時間を確保し、人数別で生徒の課題や授業展開について共通理解を図り、きめ細やかな指導に努める。 ・種々の生徒に応じた学習指導を行い、基礎基本の定着を図る。 ・授業内で質問の時間を設定し、わからないところをクラス全体で共有する等、生徒が「わかる」「できる」につなげる。		
	授業等からわかる状況(各教科)	○全教科において語学力を高め「表現力の育成」を目指して取り組む必要がある。 ●家庭学習の習慣が確立していない生徒が多いため、継続して学習習慣を定着させるべく、自学ノートやデジタルツール等を活用し、工夫・改善を行う必要がある。	・課題解決型の授業構成を中心とした授業改善	・全国学力・学習状況調査の質問項目において「授業の内容がよくわかる」「勉強の内容がよくわかる」と答える生徒の割合が全国平均より上回る。 ・数学の活用問題、国語の言語事項の問題で正答率が全国平均より上回る。 ・学校評価アンケートの質問項目において「授業が分かりやすい」「教える工夫している」と感じている生徒の割合が昨年度の91.9%を上回る。	・「課題解決型」の授業構成と「めあて」の明確化と「振り返り」活動の充実を全教科で図る。 ・校内での公開授業を各学期で設定し、教職員が相互に授業参観し反省・検討を重ね、授業力向上を図る。 ・校内研修等に講師を招請し、授業づくりの研修を行い指導力の向上に努める。 ・学習者用デジタル教科書やICTを活用した授業により、主体的・対話的な取り組みを積極的に展開する。		
学力向上に 関係する 状況	○特徴的な成果や課題 ○人が働いているときは、進んで働いている」は肯定的な回答が94.3%(全国平均89.1%) ○人の役に立つ人間になりたいは肯定的な回答が97.2%(全国平均94.6%) ●「自分にはよいところがある」は肯定的な回答が74.2%(全国平均80.0%) ●「将来の夢や目標を持っている」は肯定的な回答が51.4%(全国平均66.3%) ○気持ちのよい挨拶ができていて」と地域の方から意見をいただくなど、目標や挨拶やルールを守り、落ち着いて生活している。また、「学校生活を楽しんでいる」という質問の肯定的な回答割合が92%と9割を超え、充実した生活を送れている。 ●家庭学習の習慣ができていないという質問の肯定的な回答割合54%が低い結果となった。	・主体的・対話的で深い学びを目指した授業改善	・ICT機器を効果的に活用(クラウド環境を活かした授業実施等)				
校内研究・研修の状況	●カリキュラム・マネジメントの充実を図り、表現力の育成を目指す。また「①学力向上のための指導法の確立、②小中一貫した教科指導・生徒指導の実施、③道徳教育の充実(自尊感情・規範意識を高める)等の取り組みを推進している。学力向上に向けた授業改善やコミュニケーションスキルの向上、教科横断的な教育計画の充実を図る必要がある。 ●学力向上を目指し、定期的な職員研修や授業改善に取り組んでいる。学期ごとに公開授業を実施し、意見交流やスキルアップを推進していく必要がある。	・読書活動の推進と充実	・全国学力・学習状況調査の質問調査で「読書は好き」と答える生徒の割合が昨年度の62.8%を上回る。 ・全国学力・学習状況調査の質問調査で「昼休みや放課後、学校が休みの日に、本(教科書や参考書、漫画や雑誌は除く)を読んだり、借りたりするため、学校図書館・学校図書室や地域の図書館(それぞれ図書館を含む)にどれくらい行きますか」の週1回以上行く生徒の割合が50%を上回る。	・文化委員会による読書活動の強化。 ・学校文庫の充実を図り、読書活動を充実する。 ・各授業での調べ学習時に積極的に図書館を活用する。 ・国語科によるブックトークやビブリオバトルなど主体的な読書活動の機会を作る。			
家庭・連携 推進 状況	○生活習慣・家庭学習習慣の定着を目指し、校区内で園所連携推進を図り系統立てた取り組みを推進している。 ●読書習慣・個人差があるため体系的な読書活動の推進が課題である。(読年) ○校区内児童生徒の「目指す子ども像」について共有し、定期的な意見交流の会を開催している。 ●全国学力・学習状況調査結果の分析を小・中で共有し、児童生徒の家庭で読ませる指導方法について小中合同の研修が必要である。	・学力向上に向けた園所連携推進及び、家庭、地域との連携と協働の推進	・各学期1回(年間3回)の学校園所連絡会を開催し、中学校区として「目指す子ども像」を確認し、全教職員で共通理解を図る。 ・小・中連携し系統的にキャリア教育の推進する。 ・学期に1回(年間3回)の学校運営協議会と民生・児童委員連絡会を年間2回開催し、校区全体で協働し生徒を育てる認識を深める。	・中学校区内の児童生徒の「目指す子ども像」の共有と現状の把握、課題の分析を園所連携して取り組む。 ・系統立てた学びや成長を促せるキャリアパスポートの活用を推進し、人間関係形成・自己管理能力・課題対応能力の育成を図る。 ・学校行事、オープンスクールや授業参観の機会を設け、学校・家庭・地域の連携を推進する。			